

複層的な文化理解を目指した教育実践—中・韓両言語連携プロジェクト紹介

西 香織(明治学院大学)、阪堂 千津子(武蔵大学)

1. 連携プロジェクトの概要

我々はこれまで、『外国語学習のめやす』の教育理念(公益財団法人国際文化フォーラム編 2013:17)をゆるやかに援用しながら、日本の異なる大学の異なる外国語(中国語・韓国語・ドイツ語)クラス間で連携プロジェクトを毎回、テーマを変えて実施してきた(西・阪堂・池谷 2021)。

本連携プロジェクトは複数の言語クラスが協働して行う「複文化の学び」であること、また、目標言語の母語話者とならざるだけでなく、「異なる大学」、さらには「異なる言語クラス」を連携させていることが大きな特徴である。実施内容や進捗を強引に合わせるのではなく、異なる環境に置かれている言語クラスが無理なくゆるやかに連携ができるよう、具体的なプロジェクト内容はクラスごとにアダプテーションを行っている。また、クラス共通の大テーマの下、中テーマはそれぞれの言語クラス内で決定しており、さらに各自が選んだ小テーマに基づき調査を実施している。調査の過程で目標言語圏の母語話者に協力を仰いだり、インタビューをしたりするなどの活動をした後、学習者が自らの学習言語を使って得た情報や知識を他の言語クラスの学習者と共有し、その結果についての考察を互いに行うという流れで進められる。

2. 第 10 回連携プロジェクト

第 10 回連携プロジェクトは 2023 年度秋学期に実施し、中国語クラス(明治学院大学)と韓国語クラス(武蔵大学)が参加した。複層的な文化理解学習を通じて、学習者に自文化や異文化に対する理解、特に、「批判的な文化意識(critical cultural awareness)」(Byram, 1997)を促すことを狙いとしており、あえて、ステレオタイプの理解に陥りがちな「伝統文化」を大テーマとした。

2-1. 中国語クラス:「日中伝統文化いま・むかし」

第二外国語 2 年次開講科目である中国語クラス(13 名)が本プロジェクトに参加した。90 分計 15 回の授業のうち 13 回を本プロジェクトの活動に充てている。オンライン掲示板(Padlet)上に具体的に取扱いきたいテーマ案を募り、その中から最も希望の多かった「結婚式」「鬼のイメージ」「龍のイメージ」の 3 テーマを選んでグループ分けをし、グループごとに各テーマの伝統的な捉え方と現代の人の捉え方を比較した。テーマに従い下調べを行い、インタビュー内容を決めて中国語で質問をする準備をし、中国の大学の学生に Zoom を使ってインタビューを行った。その結果をもとに、中国語と日本語、両言語の音声・文字付き動画を作成し、鑑賞後に相互評価や意見交換を行った。

2-2. 韓国語クラス:「韓国伝統文化を日本でもっと普及させるには？」

1~3 年生の選択科目である「合同プロジェクト A」クラス(17 名)が本プロジェクトに参加した(3 年生 1 名、2 年生 10 名、1 年生 6 名)。105 分計 13 回の授業のうち、授業時間内の一部もしくは全部をあてて合計 9 回のプロジェクト活動を行った。韓国の漢陽サイバー大学韓国教育文化コンテンツ学科の 10 名(学生 8 名 + アシスタント学生 1 名、教授 1 名)と合わせて 4 グループに分かれ、授業時間内にオンラインミーティングを行った。共通テーマは「韓国の伝統文化の普及」だが、具体的な題材を各グループで話し合った結果、「韓国料理(参鶏湯)」「韓服」「伝統結婚式」「伝統楽器」の 4 テーマとなり、それぞれで文献やアンケートによる調査や実地研修(日韓合同で新大久保見学)が行われた。成果物として韓国語(一部には日本語)をつけた音声・文字付き動画を作成しクラス内で発表会を実施し、その際に行われたフィードバックを元に修正したものをネットで限定公開し、各メンバーが鑑賞後にアンケートに記入する方式で相互評価や意見交換を行った。

3. 考察とまとめ

成果物鑑賞後のアンケート自由記述回答から、中国語クラスでは、当初、同じアジア圏内であるため、日中の文化にさほど大きな違いは見られないという想定をしていたが、その想定が覆されるような結果となったことに驚く人、伝統的な捉え方と現代の特に若者の捉え方を比較したことで、伝統文化の辞書的な説明を鵜呑みにしてはいけないという気づきを得た人、自文化に対しても批判的に見ることで、自文化にも多様性があるという再認識ができた人などが確認された。韓国語クラスでは、母語話者との対話を通して、双方の伝統文化に対する異なる捉え方に気づき、自文化に対する再認識や両国文化の共通点と相違点を考察する姿勢の獲得などもみられた。直接的な言語学習機会にも恵まれ、日本側の 9 割以上の学生が「韓国語で情報交換や情報提供が十分にできた」と相互評価している一方、韓国側の大学生からは、「自分が韓国語教師になる意義や可能性を自覚できた」などの意見も見られた。

目標言語圏の母語話者の生の声を聞くことで、伝統文化に対する異なる捉え方に気づくことができると同時に、クラス内、クラス間で成果物を鑑賞して終わるのではなく、Padlet 上で互いに感想や意見を述べたり、質問をしたり、あるいは質問に回答したりすることで、自らが導いた結論に対する考察や理解がさらに深まることになり、学習者に複層的な文化理解学習の機会を提供することができた。しかし、本活動を通して履修者から他の言語や文化、あるいはその学習への興味・関心をどれだけ引き出したか、という点については課題が残る。